The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	芥川龍之介「ひよつとこ」の時代批判
Author(s)	水野, 亜紀子
Citation	日本語・日本文化研究. 2019, 29, p. 73-85
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/73699
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

芥川龍之介「ひよつとこ」の時代批判

水野　亜紀子

1.はじめに

芥川龍之介の初期作品には人間心理を描くところに主眼のあるものが多い。その中で「ひよつとこ」は、一読した印象とは全く異なる、明治期の国策に対する痛烈な批判を表現した作品なのではないかと考える。一編の分析を通してこれを論じたい。

芥川龍之介「ひよつとこ」は、1915［大正 4］年 4 月『帝国文学』に掲載され、後に『煙草と悪魔』（1917［大正 6］年）に収録される [(1)]。この作品は、これまであまり注目されることがなかった。どのように解釈をすればよいか分かりにくいところにその原因があるのかもしれない。主人公・平吉の描き方に眼目があり、人間存在の真実に迫る内容であるとすれば、一応は納得されるであろうか。実際、先行研究では平吉が描かれることの意味が様々に探られ、「ひよつとこ」は人間の内面の問題、とりわけ、二面性の問題、自己と他者の問題、近代人の自意識の問題などを取り上げる作品であると解釈される [(2)]。これに対して、本論では「ひよつとこ」の作中時間との兼ね合いから平吉を捉えることで、人間存在に関わる問題意識とは別の角度からの読み方を提示する。

作中時間の設定そのものにテーマを見出す論考には、「ひよつとこ」が近代化の中で「江戸」を放擲する、あるいは「江戸」を惜しみつつ見送る作品であるとするものがある [(3)]。隅田川が舞台であることから、大川端（隅田川の下流、吾妻橋から新大橋付近までの東岸一帯）が担う下町文化や江戸情緒に着目して論じられる。その他、「ひよつとこ」には江戸の花見といった「浮世絵風の景観」が、すでに幻影になりつつあるところが描かれると指摘する神田（2016）がある。また、江戸的な要素と近代の産物が共存する風景が美的に形象化されているところに芥川のジャポニスムの視線を読み取る髙橋（2011）もある。

先行研究が「ひよつとこ」の中に近代化の波を読み取るところに異議はない。本論もまた風景描写への着目を通して「ひよつとこ」の描く時空について考えようとするものである。ただ、作中の風景描写の中でも、これまで特に重視されることのなかった二つの建物に注目する。そうすることで、本作が日本の近代化のどのような側面を取り上げようとするものであるかをより具体的に考える。次の箇所を見たい。

> 札幌ビールの煉瓦壁のつきる所から、土手の上をずつと向う迄、煤けた、うす白いものが、重さうにつゞいてゐるのは、丁度、今が盛りの桜である。言問の桟橋には、和船やボートが沢山ついてゐるらしい。それが此処から見ると、丁度大学の艇庫に日を遮られて、唯ごみ／＼した黒い一色になつて動いてゐる。

傍線部の「札幌ビールの煉瓦壁」と「大学の艇庫」は、吾妻橋を除けば、その二つだけが本作に登場する実在の建築物である。また、場所だけではなく、時代をも読み手に伝えるような建築物である。「札幌ビールの煉瓦壁」と「大学の艇庫」は、ただ目立つので描きこまれたのであろうか。そうではなく、これらは何らかの役割を担っているのではないか。そこで、「札幌ビールの煉瓦壁」と「大学の艇庫」という二つの言葉に着目する。まずはそれぞれの言葉によってある特定の時期が指し示されることを、歴史を参照しながら確認する。さらに、「札幌ビールの煉瓦壁」「大学の艇庫」が帯びる象徴性について考える。そうすることで、「ひよつとこ」の時空がどのように設定されているかをあらためて見直す。その後で初めて平吉の形象とそこに込められる意味を探る。

2.「札幌ビールの煉瓦壁」のある風景

まずは「札幌ビールの煉瓦壁」に着目する。これは実在のビール製造販売会社の工場を指している。「札幌ビール」とは、1876［明治 9］年に明治政府が北海道札幌市に設置した開拓使麦酒醸造所を始まりとする札幌麦酒会社のことである。1887［明治 20］年に渋沢栄一が出資者に加わり設立された。社名は 1893［明治 26］年に札幌麦酒株式会社へと変更される (4)。札幌のビール製造工場がなぜ隅田川沿いにあるかというと、これは日清戦争と大きく関係する。日清戦争がもたらした好景気はビールの売り上げを伸ばした。その様子について述べる田中和夫『物語サッポロビール』を、少し長くなるが引用する。

> 明治二十七年七月から始まった日清戦争は連戦連勝で、それまでの不景気を一挙に吹き飛ばして国内を好況に巻き込んだ。景気が良くなるとともにビールの売れ行きもぐんぐんと上がり、勢いに乗った札幌麦酒会社は札幌、小樽、函館、増毛、余市などの道内はもちろん、酒田、能代、伏木などの日本海沿岸の都市にも販売店を大幅に増やしていった。二年にわたった日清戦争は二十八年四月に締結された日清講和条約で終わるのだが、戦争がもたらした国内の好況は衰えることがなかった。札幌麦酒会社も、真夏の需要期には貯蔵麦酒のすべてが欠乏するという、空前の好況ぶりだった。このため翌二十九年には資本金を三十万円に増額し、地下貯酒蔵を増築した。が、それも一時しのぎのもので、売れ行きはとどまるところを知らず、増築した分を合わせても千五百石の貯蔵容積ではなお不足することがわかった。その秋には結局、地下貯酒蔵の増築工事に再び取りかかる始末だった。これも、日清戦争がもたらした好況によるものだった (5)。

この文章にあるように、好景気によってビールがよく売れると、札幌麦酒会社は道内の販売店を増やし、地下貯酒蔵の増築をしなければならなかった。北海道の工場だけでは間に

合わなくなったため、東京にビール工場の建設が計画される。そのとき、隅田川沿いは原料や商品の運搬に便利であると考えられた。1902［明治 35］年秋には工場が建てられている[(6)]。サッポロビール株式会社広報部社史編纂室編『サッポロビール 120 年史 since1876』によると、この東京工場の建設工事は「（論者注・明治）34 年 12 月から着工した。建設工事は昼夜兼行で行なわれ、35 年秋にはほぼ全容を隅田川畔に現わし、翌 36 年夏季には出荷が見込まれるに至った」という[(7)]。

「ひよつとこ」に「札幌ビールの煉瓦壁」と書かれていることと、事実とを照らし合わせてみると、「ひよつとこ」作中の時間は、隅田川に工場が見えて桜の季節でもある 1903［明治 36］年から「ひよつとこ」の脱稿前の 1914［大正 3］年の春と考えるのが自然である。「ひよつとこ」本文に「日清戦争頃に、秋田あたりの岩緑青を買占めにかゝつたのが、当つたので」とあり、過去の話をするときに「日清戦争頃」と振り返られていることから、作中時間はそもそも日清戦争より後と設定されていることは明らかであるが、もう少し時期を限定することができそうである。花見が盛大に行われていることから、日露戦争中ではないことも分かる。「兵隊に行つてゐる」という表現が使用されているところからも、戦争中ではないといえるだろう。本文に「死んだのは四十五で、後には痩せた、雀斑のあるお上みさんと、兵隊に行つてゐる息子とが残つてゐる」とあるが、芥川は戦時中に戦地へ赴くことは「出征」と表現するのである。例えば「首が落ちた話」（『新潮』1918［大正 7］年 1 月）には、「街の剃頭店主人、何小二なる者は、日清戦争に出征して、屢々勲功を顕したる勇士なれど」とあり、「将軍」（『改造』1922［大正 11］年 1 月）には、「田口一等卒は笑つて見せた。さうして相手が気のつかないやうに、そつとポケットへ手巾ををさめた。それは彼が出征する時、馴染の芸者に貰つて来た、縁に繍のある手巾だつた」とある。「ひよつとこ」の作中時間がもし日露戦争中ならば、「日露戦争に出征している息子」と書かれるはずである。1904［明治 37］年 2 月 10 日にロシアに宣戦布告し、1905［明治 38］年 9 月 5 日に日露講和条約が調印されたことを考え合わせると、作中の時間はこの期間に当たらない。加えて、1906［明治 39］年 3 月 26 日、札幌麦酒株式会社は、ここからさらに社名を変えている。日本麦酒株式会社、大阪麦酒株式会社と合併して大日本麦酒株式会社となったのである。このとき札幌麦酒株式会社の名は消滅した。そのため、作中の「札幌」という表記に意味を見出すとすれば、「ひよつとこ」の作中時間は 1906［明治 39］年 3 月 26 日より前となるため、1903［明治 36］年春としか考えられない。

ただ、ここまで作中時間を特定する方向に話を進めてきたが、杓子定規には考えられないこともまた確かで、そのことを述べるために別の小説を参照したい。永井荷風「冷笑」（「東京朝日新聞」1909［明治 42］年 12 月 13 日～1910［明治 43］年 2 月 28 日）には「陸上から見るよりも更に河幅の広く思はれる対岸の正面には、日を受けたサツポロビイルの煉瓦造が青い空に赤く聳えて」とある。日露戦争後の時間を描く「冷笑」に「サツポロビイルの煉瓦造」という表記が登場するのである。三社合併後に社名が変更され、社名から

「札幌」が消えた後も大日本麦酒株式会社の隅田川沿いの工場は「サツポロビイル」と呼ばれたようである [8]。実際、合併後にも壁には「サツポロビール」と大文字で商品名が書かれていた [9]。そう考えると、「ひよつとこ」の作中時間は 1903［明治 36］年の春としか考えられないわけではなく、それより後である可能性もある。

「ひよつとこ」との類似がつとに指摘されている、谷崎潤一郎「幇間」（『スバル』1911［明治 44］年 9 月）は [10]、作中に明示されるように「四十年の四月の半ば頃」を描くものであるが、その花見の様子は「ひよつとこ」に描かれる人々の浮かれた様子と似通っている。日本では日露戦争後、戦勝国として賠償金が取れなかったため、一般的には景気が冷え込んだといわれるが、「幇間」には次のようにある。

> 明治三十七年の春から、三十八年の秋へかけて、世界中を騒がせた日露戦争が漸くポウツマス条約に終りを告げ、国力発展の名の下に、いろいろの企業が続々と勃興して、新華族も出来れば成り金も出来るし、世間一帯が何となくお祭りのやうに景気附いて居た四十年の四月の半ば頃の事でした。

1906［明治 39］年に札幌麦酒株式会社、日本麦酒株式会社、大阪麦酒株式会社が合併して大日本麦酒株式会社となったのも、景気が落ち、売り上げが減少したためであるが、「幇間」には景気の良い様子が描かれる。そうすると「ひよつとこ」が 1907［明治 40］年春の設定であったと考えてもさして差し支えはなさそうである。「ひよつとこ」は、1903［明治 36］年から 1914［大正 3］年の間の春（ただし日露戦争の期間を除く）を描くに違いないだろう。ここで強調したいのは、日本が好景気に浮かれていた時期が作中時間として設定されていることである。「ひよつとこ」に描かれる花見は、ただの花見ではないだろう。戦争によってもたらされた好景気に人々は酔っているのである。

「札幌ビールの煉瓦壁」について、さらに付け加えて述べたいのは、そこに漢字表記が用いられていることの意味についてである。永井荷風「冷笑」には「サツポロビイル」とあり、実際の工場の煉瓦の壁に描かれている文字から連想されるようなカタカナ表記が採用されているが、「ひよつとこ」には「札幌ビール」とある。これは会社そのものの存在がより強く意識された書かれ方ではないか。そうすると、「札幌ビールの煉瓦壁」は単なる建築物ではなく、政治的な意味を含んだ言葉かもしれない。

「札幌ビール」は、もともと 1876［明治 9］年に北海道開拓の一環として明治政府が北海道札幌市に設置した開拓使麦酒醸造所が、民間払下げとなったものである。1881［明治 14］年、開拓使長官の黒田清隆は、政府の巨額な資金をつぎこんだ北海道の官営事業を、非常に安い値段で、同じ鹿児島県出身の関西貿易商会の五代友厚らに払い下げようとした。これが藩閥と政商の結託とみられ、政府に対する批判が高まり、激しい反対運動が展開されることになる。その年、政府はこれをおさめるため、国会を 10 年後に開設することを約

束し、開拓使の事業の払い下げを中止した[11]。その経緯を考え合わせると、「札幌ビールの煉瓦壁」は、官有物の民間払下げ事件を想起させるものであることに気づく。「札幌ビール」の出自が、官有物の民間払下げ事件の開拓使麦酒醸造所だからである。「札幌ビールの煉瓦壁」は、殖産興業政策の一つとして行われた北海道開拓と、人々が政府に不信感を持つこととなった事件とを思い起こさせる言葉ともとれる。

ここまで見てきたように、「札幌ビールの煉瓦壁」を通して作中の時間について考えていくと、「ひよつとこ」の作中時間とは、日本が好景気に浮かれていた時期であり、戦争の道へと邁進していく時期であることが分かる。また、「札幌ビールの煉瓦壁」はその存在そのものが殖産興業のイメージを帯びたものであるといえる。

3.「大学の艇庫」と漕艇部

「札幌ビールの煉瓦壁」と同じように、実在の建築物として作中に書き込まれているものに「大学の艇庫」があることを指摘した。これは帝国大学（現在の東京大学）漕艇部の艇庫のことである。1887［明治 20］年、向島須崎町（現在の向島）に建てられたという[12]。この艇庫は関東大震災まで同じ場所に建っていたことから、「大学の艇庫」から推定できる作中時間は 1887［明治 20］年以降「ひよつとこ」脱稿前の 1914［大正 3］年までの間といえる。「札幌ビールの煉瓦壁」という言葉からは 1903［明治 36］年から 1914［大正 3］年の間の春（ただし日露戦争の期間を除く）と考えたので、それよりも少し幅がある。

それでは「大学の艇庫」は、どのようなイメージを帯びた言葉であろうか。古城庸夫（2011）によると、帝国大学の艇庫は大学の艇庫としては初めて建てられたもので、その艇庫が建設された後、次々と他の艇庫が周囲に建設されていったという。「明治 20 年（1887 年）4 月 16 日に帝国大学の向島艇庫が完成すると、明治 45 年までの間に 13 団体によって続々と艇庫が建設され新艇の造艇ブームが引き起こり、隅田川の吾妻橋を中心にした一大ボート文化圏が形成されていった」とのことである。帝国大学の艇庫の建設は、新艇の造艇ブームを引き起こすことにもなり、隅田川のボート文化の発展に大きな役割を果たしたことが分かる。「大学の艇庫」という言葉はそのまま、隅田川で練習をしたりレースを行ったりする帝国大学の学生のボートのイメージにつながっているに違いない。ただ、隅田川で活動を行ったのは帝国大学の学生だけではなく、様々な団体が互いに協力しながら活動を行っていた。また当時はまだボートやボート競技が珍しかった時代である。そのような背景を考慮しながら「大学の艇庫」という言葉について考えたい。

そもそも日本にボートが入ってきたのはいつ頃であろうか。日本におけるボートやボートレースの歴史は、はっきりと分かっていない点もあるが、様々な方面から調査がなされている。日本体育協会編『現代スポーツ百科事典』は「日本で、最初にボートが漕がれたのは 1867（慶応 3）年で、イギリス、オランダ、ポルトガルなどの在留外人が横浜海岸にバーヂ倶楽部をつくって、母国からとり寄せた滑席 4 人、6 人漕ぎ艇を漕いだのが最初で

ある」[13] と解説する。日本では最初、外国人がボートを漕いだ。明治維新前後も、外国人や外国水兵などによって行われている。海軍兵学寮でも早くから行われた[14]。その後、いよいよ学生がボートを漕ぐようになる。遊津編『日本スポーツ創世記』は「大学南校（論者注・東京大学の前身）時代に同校学生が外国捕鯨船のボート二隻を買い、隅田川に浮かべたのが明治六年頃であった」とする[15]。古城庸夫（2011）は「隅田川でボートが漕がれるようになったのは明治 10 年（1877 年）頃で、東京外国語学校（現東京外国語大学）の学生たちが拠金して造った 2 隻のボートは、学校の統廃合によって東京大学予備門と東京商業学校（現一橋大学）に受け継がれていった」とする。初めは本格的な競技というよりも娯楽の要素が強かったようである[16]。

日本体育協会編『現代スポーツ百科事典』によると、学生らのボート熱を高めたきっかけに、1883［明治 16］年の海軍競艇大会がある[17]。これは 6 月 3 日に隅田川の向島で行われた海軍の端艇競漕で、明治天皇の行幸の下に行われた。海事思想を普及させる目的で開催されたものである。このとき、水雷火打ち上げも行われている[18]。当時の新聞は、この大会が盛大であり、大いに庶民の関心をひいたことを伝えている。この競漕は錦絵となり「盛んに売出されて大評判となつた」ともいう[19]。

当時、日本が海軍の強化を目指していたことはいうまでもない。海事思想の普及にもつとめていた。海軍の各軍艦、海軍兵学校、商船学校などはたびたびレースを行っており、特に海軍のレースは盛んであったという。そのような中、1883［明治 16］年の海軍競艇大会は、日頃からボートの練習に勤しんでいた学生たちに刺激を与えた。この大会に触発される形で 1884［明治 17］年 10 月 17 日には隅田川で「第一回端艇競漕会」が開かれることになった。学生としては初めての正式なボートレースである。古城庸夫（2011）はこの競漕会について次のように述べる。

> 明治 17 年（1884 年）10 月 17 日に東京大学のボート好きの学生団体である走舸組が隅田川で競漕会を実施し、多くの観客が見物のために押し掛け、以後隅田川では海軍と学生によるボートレースが大変な人気を呼び、海軍の軍人たちは学生のボートレースの役員を務めるなどの協力体制を取った。

「第一回端艇競漕会」は、ボートに関わる東京大学の学生で組織された「走舸組」によって開催された。この年以降、毎年春秋の二季に大競漕会が開かれることになった[20]。ここで特に注目したいのは、ボートレースを開催するにあたり、海軍の協力を得ていたことである。海軍の軍人たちは競漕会の役員を務めたし、当日は「海軍々楽隊の賑かな奏楽裡に、十何番かの競漕が盛大に行はれ」たということである[21]。

ここまで見てきたように、学生の競漕会は海軍の競漕会から影響を受けて始められ、海軍の協力によって開催された。また、レースだけではなく、普段の練習でも海軍の指導や

協力は不可欠であった。それは東京大学以外の大学や学校においても同様であった[22]。

そのような環境の中、ボートを漕ぐ学生に期待されたことは何であっただろうか。1886［明治19］年に大学令が改正されると、東京大学は帝国大学と改められた。このとき、学生は運動部を中心とした校友会組織「運動会」を設立する[23]。「運動会」の第一回目の競漕会は「第一回帝国大学春季競漕大会」として1887［明治20］年4月16日に開催された。「ひよつとこ」作中の「大学の艇庫」という言葉が指している艇庫の開場式兼新艇進水式も、ここで一緒に挙げられている。そのときに述べられた、当時の帝国大学総長・渡邊洪基の祝辞には、学生に求めることが明確に述べられているので、内容を確認したい。「絵入朝野新聞」（1887［明治20］年4月19日）の記事をここに引用する。

> 庶幾は本会の天下に立ちて最も高尚なる協会たるの実を表し完備せる学事と共に益々其身体と精とを鍛錬し、遊戯の際又能く方正厳粛其言語を慎み秩序を明し、各自の位地を貴重し忠信以て相互の交誼を親密にし、忠君愛国の士気を培養し合同一致の慣習を馴致し、学業によりて能く社会を裨益し事に臨みては又士人の義務を尽して国家の蠱に幹たらむと期し、内は以て大学学生の名を世上に重からしめよ。外は以て本会員の称を天下に盛ならしめよ[24]。

ここでは特に、参加学生らがボートを通して「忠君愛国の士気を培養」することが願われているというところに着目したい。祝辞の中では他に、帝国大学が水上陸上のスポーツ大会を奨励して手厚く保護する理由について、「精神の発育と身体衛養とをして権衡を失はしめず相待つて長養し以て完全完美の学士を陶成せむと期するに在り」と述べられている[25]。祝辞からは、国のために尽くす人材となることが求められていることが分かる。そもそも帝国大学は官僚養成を目的としているものである。漕艇部は将来官僚となることを期待された人物で形成されたものであり、石坂友司（2002）が指摘するように、漕艇部が「圧倒的勢力」を持っていたことを考えると、漕艇部にかけられた期待が大きなものであったことが想像できる。

ボート競技は明治に入ってから主に高等教育を受けた者たちの間で広まっていくが、ボートの普及、訓練、大会の実施は、海軍の軍人の力添えなくしては実現しなかった。「ひよつとこ」作中の「大学の艇庫」という言葉は、ボートに携わった学生の存在だけではなく、隅田川のボートを支えた海軍の存在を思い起こさせる。また、1887［明治20］年「第一回帝国大学春季競漕大会」での大学総長の祝辞の内容を確認したが、そこからは、ボートを漕ぐ者たちに「忠君愛国の士気の培養」が願われていることが分かった。そこから、「大学の艇庫」は大学の漕艇部だけではなく富国強兵のスローガンをも想起させる言葉であると考える。

4.平吉とその死

ここまで、「ひよつとこ」作中に描き込まれる風景のうち、実在の建築物を指す「札幌ビールの煉瓦壁」と「大学の艇庫」について述べた。それらは富国強兵のイメージと強く結びついたものであり、作中の時間は、日本が戦争に邁進していく時期に設定されているのではないかと論じた。この設定との関わりから主人公・平吉の形象を捉えることで、「ひよつとこ」をさらに考えていくため、次は平吉に目を転じたい。

まずは簡単に、作品のあらすじを確認する。人々が吾妻橋から花見の船を眺めている。船上の宴会は賑やかである。伝馬船の上でひょっとこの面をかぶって馬鹿踊りをしている男がいたが、船が横波を受けた衝突で転落し、頓死した。その男は平吉という酒好きで、酔うと別人のように馬鹿なことを行う。しらふのときは、嘘ばかりついている。どちらが本当の自分であるかは、本人にも分からない。転落事故の後、ひょっとこの面をはずした平吉の顔は、小鼻が落ち、唇の色は変わり、白くなった額には脂汗が流れ、見たこともないようなものとなっていた。以上が「ひよつとこ」の内容である。

平吉の人となりについて説明するところを見ると、平吉は酒好きで、酔うと必ず踊るなど、馬鹿なことばかり行い、しらふの時は嘘ばかりついているという設定となっている。このような極端で尋常ならざる設定は何を意味するのだろうか。平吉に関する記述をもう少し詳しく見ていくことで、その形象には明治期の日本そのものが仮託されている可能性を指摘したい。

平吉について説明する箇所には、「死んだのは四十五」とある。亡くなったのが四十五歳というのは、明治が四十五年間であったことと符合する。あえて書かれた「四十五」という数字に意味を見出すとすれば、平吉の人生は明治年間そのものではないか。本文中には次のような記述もある。「山村平吉はおやぢの代から、日本橋の若松町にゐる絵具屋である」としたうえで、「人の噂では、日清戦争頃に、秋田あたりの岩緑青を買占めにかゝつたのが、当つたので、それ迄は老舗と云ふ丈で、お得意の数も指を折る程しか無かつたのだと云ふ」というのである。平吉は生前、日清戦争で儲けたという設定である。これは日清戦争によって景気が良くなった日本の状況と符合する。「ひよつとこ」は、死にゆく平吉と平吉の生前の様子を取り上げるが、これは酒好きで嘘つきという特徴を持った市井に生きる無名の人間の人生を描くことを目的としているのではない。平吉は明治年間の日本を表しており、平吉の人生を振り返ることは、終わりゆく明治を振り返ることを暗に意味しているのではないか。作中に登場する実在の建築物が喚起するイメージを考慮し、「ひよつとこ」の作中時間を考えるとき、平吉は明治そのものとして登場させられていると考えられる。そのように仮定したとして、もう少し話しを進めたい。もしそのように、平吉に明治期の日本そのものが仮託されているとすれば、具体的には日本のどのような部分が平吉に託されて描かれているのだろうか。そして、そこにはどのような目論見があるのだろうか。平吉が酒好きである点と、嘘つきである点に分けて、以下順に考えを述べていきたい。

平吉は酒好きで、酔っ払っては必ず踊る。さらには口に出していえないような愚行に及ぶ。本文には、平吉が酔ったときの様子が以下のように説明されている。「道楽は飲む一方で、酒の上はどちらかと云ふと、まづいい方である。唯、酔ふと、必、莫迦踊をする癖がある」「一度踊り出したら、何時までも図にのつて、踊つてゐる」「平吉が後で考へて、莫迦々々しいと思ふ事は、大抵酔つた時にした事ばかりである。莫迦踊はまだ好い。花を引く。女を買ふ。どうかすると、こゝに書けもされないやうな事をする」などである。亡くなったときも酔っていた。「余程、酔つてゐるらしい。踊りは勿論、出たらめである」とある。平吉が酔うとでたらめに踊るという設定は、好景気に舞い上がった日本全体の様子を暗に示しているのではないか。平吉は、踊りだしたら図に乗っていつまででも踊っているし、訳の分からぬ愚行にも及ぶ。そこには、好景気になったことに浮かれたまま、戦争の道に突き進んでいった人々の様子が写し取られていると考えられる。

また、平吉は酒を飲んでいないときは嘘ばかりついている。本文には、平吉がしらふのときの様子が以下のように説明されている。「平吉は自分ながら、何故さう嘘が出るのだかわからない。が人と話してゐると自然に云はうとも思はない嘘が出てしまふ、しかし、格別それが苦になる訳でもない。悪い事をしたと云ふ気がする訳でもない。そこで平吉は、毎日平気で嘘をついてゐる」「平吉の一生（人の知つてゐる）から、これらの嘘を除いたら、あとには何も残らないのに相違ない」などである。作中に提示されていく平吉の過去のエピソードも、その内容は嘘ばかりである。平吉がしらふのときには嘘ばかりつくという設定は、国民に対して嘘ばかりつく政府の様子を暗に示しているのではないか。当時の日本は自国を守るという名目で富国強兵を唱えたが、結果的には自ら戦争の道を選び取っていった。そのさまが嘘ばかりつく平吉として形象化されているのではないかと考えられる。

平吉が酔うとでたらめに踊るというところは、好景気に舞い上がった日本の雰囲気を揶揄しており、しらふのときには嘘ばかりつくというところは、政府を非難している。そのように冷たい批判の目が注がれていると考えるのは、平吉が決して立派な人物としては描かれていないからである。そもそも、「ひよつとこ」という言葉も男性を侮蔑する言い方である。さらに、次の点にも注目したい。「ひよつとこ」の中には二ヵ所、英単語が使用されているところがある。唐突とも思える英語の使用には主題との関係が認められると一般的に考えられているが、「ひよつとこ」の場合はどうであろうか。

・その内に、酔が利いて来たのか、ひよつとこの足取がだん／＼怪しくなつて来た。丁度、<u>不規則な Metronome のやうに</u>、お花見の手拭で頬かぶりをした頭が、何度も船の外へのめりさうになるのである。

・<u>Janus と云ふ神様には、首が二つある</u>。どつちがほんとうの首だか知つてゐる者は誰もゐない。平吉もその通りである。

「不規則な Metronome」はそれだけで矛盾した意味を内包する言葉である。軸足を定めることができない平吉の様子を指す。また、「Janus と云ふ神様」は平吉の二面性を説明するときに用いられる。これらの言葉は、明治政府を評価する言葉そのものにも見えはしまいか。政府が軸足を定めることができないまま戦争の道へ進んでいったのだと考えるならば、「不規則な Metronome」という表現が当てはまる。国民から見てスローガンと事実との間に齟齬があり、二面性を感じるならば「Janus と云ふ神様」という表現が当てはまる。この解釈との関わりから末尾についても考えたい。最後の場面で平吉は面を取ってくれといいながら苦しんでいる。

> 「面を……面をとつてくれ……面を」頭と親方とはふるへる手で、手拭と面を外した。しかし面の下にあつた平吉の顔はもう、ふだんの平吉の顔ではなくなつてゐた。小鼻が落ちて、唇の色が変つて、白くなつた額には、油汗が流れてゐる。一眼見たのでは、誰でも之が、あの愛嬌のある、へうきんな、話のうまい、平吉だと思ふものはない。たゞ変らないのは、つんと口をとがらしながら、とぼけた顔を胴の間の赤毛布の上に仰向けて、静に平吉の顔を見上げてゐる、さつきのひよつとこの面ばかりである。

面を取ってみると、平吉の顔は見たこともないようなものになっていた。この場面にもまた、政府への非難を読み取ることができる。震える手で思い切って「面」を剥いでみると、その下には見たこともないような「顔」があったのである。政府は戦争の道に進んでいく中で自己矛盾を抱えこんでいた。国民は酔いや嘘の中ではそれに気がつかなかったが、後になってよくよく考えてみると、本来の期待とは異なった方向に進んでいたのである。そのことを暗に示しているのではないか。平吉に明治時代の日本の振る舞いが仮託されていると考えると、本作には厳しい批判精神を読み取ることができるのである。

5.まとめ

「ひよつとこ」に描きこまれる風景のうち、実在の建築物に着目して一編を論じた。「札幌ビールの煉瓦壁」と「大学の艇庫」は、富国強兵のイメージと強く結びついた言葉であり、作中の時間は、日本が戦争に邁進していく時期に設定されていることを明らかにした。さらに、平吉という登場人物を明治時代の日本の振る舞いそのものを形象化したものと捉えることで、「ひよつとこ」が時代批判を行う作品として仕立てられている可能性について述べた。芥川には日清戦争に関わる「首の落ちた話」（『新潮』1918［大正 7］年 1 月）や日露戦争に関わる「将軍」（『改造』1922［大正 11］年 1 月）などがある。従来「ひよつとこ」は他の初期作品との関係で捉えられてきたが、戦争を扱った後の作品にも通じるような関心の持ち方が見える。その意味で、本作の評価には再考の余地があると考えられる。

芥川の初期の作品は、主に人間心理を描くものとして取り上げられるが、その中で「ひ

よつとこ」は、国策に対する痛烈な批判を表現する側面を持ち合わせた作品であるかもしれない。語り手が主題にまつわる解説を加えないため、何がいいたいのか分かりにくいが、表現面には芥川の一種の挑戦があるといえる。この挑戦は、決して次につながっていくものではなかったかもしれないが、見過ごすことはできないであろう。

［付記］「ひよつとこ」他、芥川龍之介の作品本文の引用は『芥川龍之介全集』（岩波書店、1995-1996）に拠る。永井荷風「冷笑」の引用は『荷風全集 第七巻』（岩波書店、1992）、谷崎潤一郎「幇間」の引用は『谷崎潤一郎全集 第一巻』（中央公論社、1981）に拠る。引用はすべて、旧字体は現行のものに改め、ルビや圏点は省略した。傍線は論者による。

註

（1）本論は『煙草と悪魔』掲載時の本文を分析の対象とする。

（2）松本（1983）、石割（1985）、中村（1990）、酒井（1990）、文（1996）、阿部（1997）、小野（2000）など。

（3）石割（1974）、清水（1987）、山崎（1987）。

（4）サッポロビール株式会社広報部社史編纂室編（1996）pp.933-938 を参照してまとめた。

（5）田中（1993）p.142

（6）隅田川沿いに工場が建設されるまでの経緯は、田中（1993）やサッポロビール株式会社広報部社史編纂室編（1996）に詳しい。田中（1993）には「販路拡大は東京や横浜が中心であり、いよいよ東京に分工場を建設する時期だと判断した植村（論者注・植村澄三郎）は、原料搬入にも製品搬出にも便利な隅田川沿いを物色する」（p.149）とある。サッポロビール株式会社広報部社史編纂室編（1996）には「札幌工場の各種製造設備を拡充する一方で、東京工場の建設用地として隅田川沿いにある本所区中ノ郷瓦町 1 番地（現・アサヒビール本社所在地）の旧秋田藩主佐竹邸跡 5,333 坪余（1 万 7,631 ㎡）を（論者注・明治）33 年 3 月に買収した。34 年 3 月には工場建設の許可が下りた」（pp.118-119）とある。

（7）サッポロビール株式会社広報部社史編纂室編（1996）p.119

（8）会社の定める正しい工場名は「東京工場」であった。大日本麦酒株式会社となった折には「吾妻橋工場」へと変更された。

（9）「冷笑」に見られる「サツポロビイル」という表記は、壁面の表記とは少し異なるが、無関係ではないだろう。サッポロビール株式会社広報部社史編纂室編（1996）p.259 には、1923［大正 12］年の関東大震災により被害を受けた吾妻橋工場の写真が掲載される。その壁面には「サツポロビール」の大きな文字が見える。

（10）佐伯彰一（1987）参照。

（11）鈴木編（1969）、サッポロビール株式会社広報部社史編纂室編（1996）、日本史広辞典編集委員会編（2001）参照。

（12）東京帝国大学漕艇部編（1936）pp.36-39 を参照。
（13）日本体育協会編（1971）p.465
（14）遊津編（1975）p.38
（15）同上
（16）日本体育協会編（1971）には、次のようにある。「各学校の若人は、滑席艇は高嶺の花として、いわゆる、黒船の甲板に並んでいる艀（はしけ）の中古品を同志クラブで買って、1877（明治 10）年ごろから隅田川の両国や品川湾、大阪湾に漕ぎ出した。この艇はせいぜい舵手つき 4 人漕ぎで、今のボートのように細くはなく、バッテーラ（bateira ポルトガル語の小舟の意）とよばれたものであった」（p.465）
（17）日本体育協会編（1971）p.465
（18）前掲書 p.465、遊津編（1975）p.40 参照。
（19）東京帝国大学漕艇部編（1936）pp.12-14。そこには当時の「東京日日新聞」「読売新聞」の記事が紹介されている。
（20）遊津編（1975）p.39
（21）東京帝国大学漕艇部編（1936）p. 10。当時の競漕会の様子について石坂（2002）は「大臣やその令嬢、外国公使、皇族が招待され、海軍の軍楽隊が演奏をしたり、万国旗が飾られ、ボートの錦絵が売られるなど、まさに「近代」という象徴空間を体現していた」と述べる。
（22）遊津編（1975）など。
（23）石坂（2002）に詳しい。
（24）この記事は東京帝国大学漕艇部編（1936）pp.41-42 に紹介されている。
（25）同上

参考文献

遊津孟編（1975）『社団法人全国大学体育連合図書① 日本スポーツ創世記』恒文社
阿部寿行（1997）「『ひょっとこ』における場面性考察―表現に見る対読者構造について―」『緑岡詞林』21、pp.37-49
石坂友司（2002）「学歴エリートの誕生とスポーツ―帝国大学ボート部の歴史社会学的研究から―」『スポーツ社会学研究』10、pp.60-71
石割透（1974）「芥川龍之介「ひよつとこ」をめぐっての私感」『研究紀要』9、pp.1-11
石割透（1985）「「老年」と「ひよつとこ」―下町世界との対応―」『芥川龍之介―初期作品の展開』有精堂出版、pp.36-48
小野隆（2000）「「ひよつとこ」論」『専修国文』67、pp.21-36
神田由美子（2016）「「水と橋の物語」―芥川文学の東京空間―」『芥川龍之介研究』10、pp.172-180

古城庸夫（2011）「ボート競技が行った遠漕についての研究」『情報と社会』21、pp.43-52
佐伯彰一（1987）「芥川と谷崎―『ひよつとこ』と『幇間』と―」（石割透編『芥川龍之介・作家とその時代 日本文学研究資料新集 20』有精堂出版、pp.52-58）
酒井英行（1990）「「ひよつとこ」―芥川龍之介の死―」『蟹行』4、pp.21-30
サッポロビール株式会社広報部社史編纂室編（1996）『サッポロビール 120 年史 since1876』サッポロビール株式会社
清水茂（1987）「芥川龍之介と「明治」」（石割透編『芥川龍之介・作家とその時代 日本文学研究資料新集 20』有精堂出版、pp.1-8）
鈴木勤編（1969）『日本歴史シリーズ第 18 巻 明治維新』世界文化社
髙橋龍夫（2011）「「ひよつとこ」論 ジャポニスムの片鱗」『芥川龍之介研究年誌』5、pp.23-34
田中和夫（1993）『物語サッポロビール』北海道出版社
東京帝国大学漕艇部編（1936）『東京帝国大学漕艇部五十年史』東京帝国大学漕艇部
中村友（1990）「「ひよつとこ」考 改稿の意図によせて」『学苑』602、pp.85-93
日本史広辞典編集委員会編（2001）『日本史小辞典』山川出版社
日本体育協会編（1971）『現代スポーツ百科事典』大修館書店
文盛業（1996）「芥川龍之介の初期習作の世界」『国学院大学大学院文学研究科論集』23、pp.73-80
松本常彦（1983）「「老狂人」から「羅生門」まで 「羅生門」前史における視点の獲得と関連して」『語文研究』55、pp.19-28
山崎健司（1987）「「大川の水」から「老年」「ひよつとこ」へ―芥川龍之介の作家的形成について―」『稿本近代文学』10、pp.82-98